

第78回ソフィア祭

多彩な企画で来場者を魅了

第78回ソフィア祭(学園祭)が、11月1日から4日にかけて開催された。今年のテーマは「VIVID」。テーマに込めた「ソフィア祭に関わる一人ひとりの個性という色が、生き生きと、鮮やかに描かれてほしい。そして、ソフィア祭が終わった後でも、思い出が鮮明なまま記憶に刻まれ続けて欲しい」というソフィア祭実行委員会の想いのおり、キャンパスは活気に満ち溢れた。

1日の前夜祭は、7号館前の特設会場で行われ、応援団チアリーディング部EAGLESによる開幕宣言の後、上智ナンバー1の歌声を決める「歌うま王決定戦」や課外活動団体のダンス、ライブの他、学生がモデルとして出演するファッションショーなど、熱気溢れるパフォーマンスが繰り広げられた。前夜祭のクライマックスでは、若年層を中心に人気を集めるバンド「moon drop」が特別ライブを行い、ソフィア祭の開幕を華やかに彩った。

3日には本祭のメインイベントの一つである「Sophian's Contest」が行われた。ファイナリストの5人が自身の魅力や活動内容をアピールし、競い合った。グランプリには、自身の経験をもとに「和」の魅力を発信した中嶋未来さん(外英3)が選出された。自己PR部門、SNS部門も制覇し、3冠となった。

4日には例年好評企画となっている「Sophian's Got Talent」が開催された。「新たな未来のスターを発掘するオーディション」というコンセプトのもと、6組のファイナリストたちが各々の特技を披露した。優勝は男女3人組のアコースティックユニット「Acoustar」。3人の絶妙なセッションと圧倒的な歌声が多く票を集めた。

その他、さまざまな団体による特設ステージでのパフォーマンスや高校生向けの模擬授業・入試相談・学科相談



キャンパス内は多くの来場者で活気に満ちた



「Sophian's Contest」ファイナリストの5人



「Sophian's Got Talent」のファイナリストたち



賑わいの中でフィナーレを迎えた

コーナー、模擬店など、多数の企画が行われた。

閉幕式では、教室グランプリや模擬店グランプリの表彰なども行われ、盛況のうちに幕を閉じた。

ソフィア祭実行委員長の上坂瑞さん(総社3)は「色々大変なこともあり、自身も完璧なリーダーを務めきれたとは思えないが、皆さんのおかげで最終日はとてもよい雰囲気で行われた。特に委員会メンバーたちには、こういった経験をさせてくれたことへの感謝を伝えたい」と、ソフィア祭を振り返った。

音楽協議会主催 第48回音楽祭

テーマは「Brillante(ブリランテ)」

10月5日、音楽協議会主催第48回音楽祭が、越谷サンシティ大ホールにて開催された。音楽祭は、音楽協議会に所属する課外活動団体(全9団体)が一堂に会し、日頃の練習の成果を披露するコンサート。昨年度までよりもさらに大規模な会場に650人を超える観客が来場した。

今回の音楽祭テーマ「Brillante(ブリランテ)」は、イタリア語で華やかに・輝かしく、という意味の音楽用語。各団体が自分の持ち味を発揮して輝けるような音楽祭にという願いが込められている。

箏曲部の演奏で幕を開けた演奏会は、各団体の単独ステージから、有志メンバーがオーケストラ曲に挑戦するジョイントステージへと続いた。ジョイントステージでは、ショスタコーヴィチの「祝典序曲」、プッチーニの「トゥーランドット」が披露された。

最後は総勢100人を超える大編成の有志メンバーが参加したグランドオー



グランドオーケストラは映画音楽メドレーを披露

ケストラの映画音楽メドレーが演奏され、バック・トゥ・ザ・フューチャー、ジュラシック・パークのテーマなど7曲で締めくくった。

音楽協議会会長で管弦楽部に所属する江頭美月さん(総グ3)は、「各出演者が真摯に『今この瞬間』と『音楽』に向き合い、何よりも楽しんでいる演奏会でした。その輝きを発揮し、お客さまにお届けできたのは、音楽祭というステージがあったからです。関係者の皆さまに心より感謝申し上げます」と話している。

ひと

学生、作家、母親として 学び続ける

「ファンタジー、恋愛もの、ディストピアなど色んなジャンルのストーリーを書いています。子どもの頃の苦い思い出がベースになっていて、どうしようもない理不尽さの中にも光を見出せるような話が多いですね」

学生でありながら作家としても活躍する佐藤菜月さん(筆名：柳なつき)は、自身の作風についてこのように話す。2014年に『天使は、二度泣く。』でデビューし、現在まで世に送り出してきた作品は書籍化を果たしたほか、新人賞を獲得するなどいづれも注目を集めてきた。

「文章を書いていると心が落ち着くんです。初めは自分自身を癒すために小説を書き始めましたが、作中の登場人物に自分の想いを投影したり、登場人物になったつもりで感情移入もすることもあるので、他者理解も執筆においては重要なテーマです」

佐藤さんは、学生としてはユニークな経歴を持つ。「11年に入学した神学部を一度退学して、他大学で哲学を学び直しています。それも7年半かけて。その間に結婚を経て、21年にまた神学部に戻り、二度の出産を経験して今に至ります」

学生、作家、母親と複数の役割をこなす生活は実に多忙だ。朝4時に起きて執筆活動や宿題をこなし、日



神学部神学科4年 佐藤菜月さん

中は育児に授業と息つく暇もない。そんななかでも、日常生活から着想を得て、メモ帳には新たなアイデアがたくさん溜まっている。

「振り返ってみると、退学したころの自分は若さもあって視野が狭かったのかもしれない。哲学を学んでから改めて神学を学ぶと、物事の見方に深みが出て感じています。カトリックの宗教観と、悩みを抱える心理描写を描く作家としての矜持は重なる部分も多いですね」

慌ただしい日々の中でも、母親として子どもたちと向き合う時間は特別だ。「子どもたちの日々の成長を見届けられることに幸せを感じています。これからは自分自身のため、家族のため、そして他者のために、『人間の尊厳』を自らのテーマに表現活動を続けていきたいと思っています」

上智大学 第62回荒鷲の集い

1年の集大成として3部一体の演技を披露

11月29日、上智大学応援団が「校歌講習会及び第62回荒鷲の集い」を6号館101教室で開催した。「荒鷲の集い」は、日頃応援に力を尽くす応援団が主役となり、日々の練習の成果を披露する場だ。今年度のテーマは、応援団のスローガンでもある「繫勝(けいしょう)」。今年で64年の歴史を誇るその歩みを未来に「継承」するとともに、関わるすべての人との「繋がり」への感謝を表現しながら、活気あふれる演技・演奏を披露した。

オープニング演技はソフィアマーチから始まり、その迫力ある掛け声と演奏、ダンスで一気に会場の熱気を高めた。在学生やOBOG、教職員など会場いっぱい集まった参加者は、配布されたオリジナルのハリセンと拍手で共に盛り上げた。

第一部では、多くの在学生に校歌を広めることを目的に、2012年から始まった校歌講習会を実施。スクリーンに映し出された歌詞をたどりながら、会場一体となって1番を斉唱した。

第二部は、チアリーディング部1年生のフレッシュな演技から始まり、伝統の第一応援歌、第二応援歌、凱歌などを披露。また、新企画として体育団体連合会の5団体と共に披露したダンスで、大いに会場を盛り上げた。さらに、応援団を構成するチアリーディング部・吹奏楽部・リーダー部の3部それぞれが、今年1年の想いをのせて演技・演奏を行った。コロナ禍に入学し



熱いエールを送る応援団



ハリセンや拍手で応える参加者たち



団長による最後のエール

て思うように活動できなかった時期がありながらも、4年間懸命に応援団と向き合った幹部17人による集大成の演技には、会場から大きな拍手と歓声が沸き起こった。

最後に学生歌、愛唱歌、校歌が歌われ、このイベントを最後に引退する団長による「フレイ、フレイ、SOPHIA」の力強いエールで締めくくられた。